

巻頭言

『恐れるな』

—真理を求め、他者と共に生きる者たちの旅立ちに際して—

立教大学チャプレン 中川 英樹



開学 152 年目を迎える立教大学に、今年も卒業の季節が訪れました。

厳しかった冬の寒さを過ぎ越し、眩く温かな春の光に包まれた、立教大学のキャンパスは、これまで幾度となく見慣れてきた風景でありながら、この時季には、どこか特別な表情を帯びて、わたしたちの前に現れます。それは、ここで学び、出会い、悩み、成長してきた日々が、一つの区切りを迎えようとしているからなのだと思います。卒業とは、喜びのときであると同時に、静かな緊張と、言葉にしがたい不安を伴うときでもあります。

これから、皆さんが踏み出していく世界は、必ずしも見通しのよい道ばかりではありません。自分はどこへ向かうのか、何を抛り所として生きていくのか… そうした問いが、これまで以上に切実な重みをもって迫ってくるのが、今の、この旅立ちの時なのだと思うのです。

そのような人生の節目に、神は繰り返し、ある短い言葉をもって人々に語りかけてきました。

「恐れるな」。

この、「恐れるな」という言葉は、聖書の中で最も頻繁に顕れる、神の言葉の一つです。それは、神が人に新しい使命を託される時、未知の道へと送り出される時、あるいは、人が自らの限界と向き合わざるを得ないときに、必ずと言ってよいほど語られます。この言葉は、恐れを感じることで自己を否定するものではありません。むしろ、恐れを抱かずにはいられない現実の直中で、「それ

でも、あなたは一人ではない」という、神の約束を告げる言葉なのです。



立教学院諸聖徒礼拝堂

立教大学の建学の理念は、「真理の探求」と「他者と共に生きる」ことにあります。

ここでいう真理とは、単なる知識の集積や、正解を早く見つけることではありません。むしろ問い続けること、立ち止まり、考え、対話し、容易な答えに性急に飛びつかずに、なお探し求め続ける姿勢そのもののことです。そして、その探求は決して孤独な営みではなく、常に他者との関わりの中で深められていくものです。異なる意見に出会い、理解できない価値観と向き合い、ときに傷つきながらも、なお共に生きようとするところに、立教が大切にしてきた学びの真価があります。

卒業とは、その探求が終わることを意味しません。むしろ、それは、大学という守られた環境を離れ、それぞれの現場で、より誠実な私たちで真理を問い続けていくための出発点です。社会に出れば、答えの出ない問いや、割り切れない現実の数多く直面します。そのとき、「恐れるな」という言葉は、安易な楽観を与えるものではなく、「問い続ける勇気」

を支える言葉として響いてきます。分からないまま、しかし問い続けること、迷いながら、しかし歩みを止めないこと… それ自体が、立教で培われた学びのカタチなのです。

また、立教の「他者と共に生きる」という、もう一つの理念は、卒業後の人生において、なおいっそうの豊かさを伴って、皆さんを支えることになると思います。

効率や成果が優先され、他者を競争相手として見るのが当たり前になりがちな社会において、弱さを抱えた存在として互いに支え合い、共に生きる道を選び取ることは、決して容易なことではありません。だからこそ、「恐れるな」という言葉は、他者と関わることへの不安や、傷つくことへの恐れを抱える皆さんに向かって、静かに、しかし力強く語りかけます。「恐れに閉じこもるのではなく、恐れを抱えたまま、なお隣りに人に向かって心を開け」と。

立教大学のチャペルは、そのような学びと歩みを、祈りのうちに見守ってきました。チャペルで過ごした沈黙の時間、響いてきたオルガンの音色、静寂の中で自分自身と向き合ったひととき… その時々の中で、皆さんは気づいたはずです。自分が決して一人ではなかったことに。そのことは卒業後も、人生の折々で想い起こされることになると思います。それらは、困難な現実から逃れるための記憶ではなく、現実の直中で生き抜くための、確かな支えとして、皆さんの内に息づき続けます。これからも、皆さんは決して一人ではないのです。

「恐れるな」という言葉は、祝福の言葉でもあります。

それは、「あなたの歩みのすべては、すでに神のまなざしの中に置かれている」という宣言です。成功も失敗も、まっすぐな道も回り道も、そのすべては、神のもとでは、無意

味に見捨てられることはありません。真理を探し、他者と共に生きようとする、その歩みそのものが、尊いものとして、神に受けとめられているのです。

卒業生の皆さん。

どうか、恐れを抱く自分を否定せず、そのまま前へと進んでください。「恐れるな」という言葉は、強さを装うことを求める言葉ではありません。弱さや迷いを抱えたままでも、歩み出してよいのだという、深い励ましと信頼の言葉です。

また、卒業生たちを送り出すご家族、教職員、そして後輩たちにも、この言葉は向けられています。手を離し、送り出すことへの不安や、別れの寂しさの中で、神は同じように語りかけておられます。「恐れるな。わたしは共にいる」と。

この春、立教大学から新たな世界へと旅立つすべての人に、豊かな祝福がありますように。

真理を求め続ける勇氣と、他者と共に生きる希望を携え、「恐れるな」という言葉に支えられながら、それぞれに与えられた場所で、自らの歩みを紡いでいくことができますように。

その一步一步の上に、神からの恵みが、この上なく、豊かにありますように、と祈り続けます。



立教学院聖パウロ礼拝堂